ISSN 1344—8366

『古代アメリカ』 *América Antigua*

第 22 号, 2019 年, 抜刷 (pp.1-2)

<序論 特集>

メソアメリカの比較文明論研究

序論

青山和夫 (茨城大学)

Comparative Case Studies of Mesoamerican Civilization

Introduction

Kazuo Aoyama (Ibaraki University)

古代アメリカ学会

Sociedad Japonesa de Estudios sobre la América Antigua

Japan Society for Studies of Ancient America

特集：メソアメリカ比較文明論

序論

青山和夫
(茨城大学)

1. 「古代アメリカの比較文明論」プロジェクト

従来の古代アメリカ研究では、メソアメリカ文明とアンデス文明が個別に研究される傾向が強く、さらに地域毎に細分化・専門化されてきた。旧大陸の文明の影響を受けずに発達した一次文明としての両文明それぞれの特性や社会変化が比較研究によって十分に検討されてこなかったのが問題といえよう。さらに研究対象とする時代がスペイン人の侵略以前のいわゆる先スペイン期に限定されており、古代アメリカ文明の後世への影響が考慮されていないのも問題である [青山他 2014]。メソアメリカとアンデスの比較文明論研究は両文明の特徴をより明らかにするだけでなく、人類の文明とは何かをより深く考察する上でも欠かすことができない。

科研費新学術領域研究の助成による「古代アメリカの比較文明論」プロジェクト（平成26～30年度、領域代表者：青山和夫）では、科研費新学術領域研究「環太平洋の環境文明史」プロジェクト（平成21～25年度、領域代表者：青山和夫）の諸成果を踏まえてメソアメリカとアンデスの二大文明に地域を絞り、さらなる発展を目指した。青山らは従来の世界史研究で軽視されてきた古代アメリカの二大文明について、新たな視点や手法によって比較文明論を展開した。考古学、歴史学、文化人類学等の異なる分野の人文科学と自然科学の多様な研究者が集う、文理融合の共同研究である。共同研究のキーワードは、「編年」と「資源化」である。メソアメリカ文明班（代表：青山和夫）とアンデス文明班（代表：坂井正人）が自然科学的編年・環境史班（代表：米延仁志）と共同調査を実施して、両文明それぞれの特性と詳細な社会変化を高精度編年によって実証的かつ多面的に比較した。さらに植民地時代から現代の先住民文化班（代表：鈴木紀）を組み合わせ、後世の人々がどのように能動的に古代アメリカ文明に向き合い、それを自分たちに役立つ資源として再認識していくかという、これまでの研究が見過ごしてきた資源化の過程に着目した [青山他 2019]。

2. 特集 メソアメリカ比較文明論の内容

本号の特集「メソアメリカ比較文明論」は、『古代アメリカ』で初めてのメソアメリカ考古学の特集である。『古代アメリカ』第20号では、アンデス考古学の特集「"lo andino"―考古学の立場より」が組まれた。本号の特集では、「古代アメリカの比較文明論」プロジェクトのメソアメリカ文明班の研究代表者、研究分担者と研究協力者が共同研究の成果の一部を論述する。なお本号に所収できなかった論文は、次号に投稿する予定である。

青山和夫、嘉幡茂、塚本憲一郎、市川章、福原弘識、長谷川悦夫は『メソアメリカの複雑社会の起源・形成・衰退に関する比較文明論研究』において、マヤ (Maya) 文明のセイバル (Ceibal) 遺跡とエル・パルマール (El

Palmar) 遺跡、メキシコ中央高原のトラランカレカ (Tlalancalca) 遺跡とテオティワカン (Teotihuacan) 遺跡、メソアメリカ南東部 (Southeastern Mesoamerica) のチャルチュアパ (Chalchuapa) 遺跡とサン・アンドレス (San Andrés) 遺跡、中央アメリカ南部 (Lower Central America) のニカラグア太平洋岸のチラマティーヨ (Chilamatillo) 遺跡やラ・パス (La Paz) 遺跡等の事例研究を通して、メソアメリカにおける複雑社会の起源・形成・衰退のプロセスを実証的に比較検討する。長期間の社会変化の事例を人口変動、環境変動、戦争、交換、イデオロギー等から比較する共同研究の現段階の成果をまとめるとともに、未解決な問題を述べて今後の研究の方向性を明らかにする。青山らは、社会を動かす仕組みを提供した公共建築と文字に関する共同研究の中間報告を『古代アメリカ』第20号の調査研究速報 [青山他 2017] としてまとめたが、本論はその続編である。

嘉幡茂、フリエタ M = ロペス J、荒木昂大、村上達也は「水の神と火の神—割って入った神の出現による社会の変化」において、形成期終末期 (前 100~後 250 年) から古典期前期 (250~450 年) のトラランカレカにおける「大規模統合システム」の変化 (社会背景とその要因)、なぜ必要であったのか (導入過程) 及び具体的にどのように実践されたのか (考古学データとその解釈) について論述する。嘉幡らは一連の火山噴火 (火の老神の怒り) が引き起こした社会的混乱を収めるために、水の神と火の神を融合させ、両者の恩恵を享受する舞台としてタルー・タブレロ建築様式を採用した新型ピラミッドを建造するようになったと考える。都市全体の統合化を図るこのプロジェクトを「大規模統合システム」と呼称する。トラランカレカでは、巨大なモニュメント建造物の建設が盛んになり、多くの都市住民が公共事業に参加することによって社会全体が統合されていた。

村上達也、福原弘識、ディエゴ・マタダマス・ゴモラ、嘉幡茂は「酒と水と嵐の神の壺—形成期終末期トラランカレカにおける都市の発展と社会統合—」において、世帯や親族などの小規模集団を超えた規模で都市の一部の住民を統合した「中規模統合システム」について論じる。形成期終末期には、都市住民全体を対象にした儀礼と多くの共通点をもつ儀礼が中位レベルの社会集団内でも行われた。都市全体と世帯の間の中位レベルの社会統合システムと実践が、都市の形成・発展を可能にした重要なメカニズムの一つであったと考える。

長谷川悦夫は「故郷を離れマナグア湖のほとり—チョロテガとニカラオの移住をめぐる諸問題—」において、チョロテガとニカラオというメソアメリカ系の民族集団のニカラグア移住について論じる。メソアメリカからニカラグアへの移住は中継地を経由した間接的で小規模なものであった。メキシコ中央高原やマヤ低地では国家的な政治組織が形成されたが、先スペイン期のニカラグアでは大規模な複雑社会は誕生しなかった。メキシコ中央高原やマヤ低地よりも雨季と乾季が明確なニカラグアでは、おそらく気候的にトウモロコシ栽培は難しく、人々は干ばつに強いマニオクや湖の水産資源に依存した。保存がきくトウモロコシが安定的に供給されたメソアメリカに比べると、食料供給と人口増加に限界があったといえよう。一方で長谷川によれば、チョロテガとニカラオは、故郷との繋がりや固有の文化伝統に固執せずにニカラグアの環境に適応して新しい生業を発達させ、在地の民族集団と共生しながら成功した開拓者ともいえる。

参考文献

青山和夫・嘉幡茂・市川彰・長谷川悦夫・福原弘識・塚本憲一郎

2017 「メソアメリカ文明の通時的比較研究序論」『古代アメリカ』20:79-94。

青山和夫・米延仁志・坂井正人・鈴木紀

2014 「『古代アメリカの比較文明論』プロジェクトの目標と展望」『古代アメリカ』17:119-127。

2019 『古代アメリカの比較文明論：メソアメリカとアンデスの過去から現代まで』京都大学学術出版会。